

宮本雅史／作『電池が切れるまで』

わたしには、小さな親友がいました。
彼は当時小学3年生、神戸に住んで、リンパ性白血病を患っていました。彼のお母さんがFaceBookをやっており、わたしが白血病にもかかわらず登山を続けてる記事をアップしていたので、興味を持たれたようです。

お母さんは、息子の病気が治る事を信じ、そして、同じような病気で苦しんでいる家族や子供達に向けて発信をしていたようです。当時わたしは、抗がん剤の治療の合間は退院をさせられるので、毎回バカ尾根を登り尊仏山荘に泊まるのが、たのしみでした。先に彼より退院でき、谷川南陵やゲレンデクライミングの写真をアップしていました。

ある日、お母さんから、もし良ければ見舞いに来てくれないか？と連絡があり、喜んで、神戸まで行きました。

病院に向かい、色々な話をしました。学校の友達のことを聞いたり、山について話したり楽しい時間でした。お母さんが、少し離席された時「ルンバール(髄注)は痛いでしょう、あれやだよね、おじさんも苦手だよ」なんて話をした時、彼は「うん、でもね、ぼくが我慢できたらお母さんとお父さんが、喜ぶから、痛いけど痛くないんだ」と、いわれ、驚きました。ルンバール(髄注)とは、脊椎に注射をする処置の事ですが麻酔の効かない、脊椎に直接針を刺すわけですから、シヤレにならない痛みです。それを両親のためと我慢できる、彼の健気さに心を打たれました。

治ったら一緒に山に登る約束を指切りしたとき、痩せた彼の指はとても力強かったです。帰り際にお母さんに、彼が言った事を話したら、肩を震わせていました。いつもルンバール(髄注)が終わると、ご褒美にケーキやパフェをご馳走していたらしいのですが、彼の本心は両親を安心させる為だとわかったせいでしょう。

数ヶ月して、ある日急にFace Bookのアップがなくなりました。何かあったとは、思ったのですが、聞くわけにもいかず。また、数ヶ月後お母さんからメッセージで彼が他界したことを聞きました。生きていたときは残念ながら一緒に登れませんでした。わたしの心の中では彼は生きています。いつも一緒に登って、語りかけるようにしています。

この本は、年齢を見ながら読んでください。病気は嫌だけど、病気になってよかったなどと四歳の子が言い、当たり前毎日の大切さを教えてくれました。

おススメの一冊です。 角川つばさ文庫 2009年3月刊 605円

(にしやま)

